

SKETCH

未来ドラフト2021

わたしと難民がつながるアイデア・コンペティション

FUTURE

エントリーサポートブック



目次

シリア難民の声を聞いてみよう	p.2
難民受け入れ国で起きている課題	p.6
シリア難民と受け入れ国ヨルダン	p.8
偏見や差別の普遍性	p.11
考え方のポイント	p.13
シリア・ヨルダンの子どもたちが 一緒に参加したイベントの一例	p.15

「シリア危機」とは

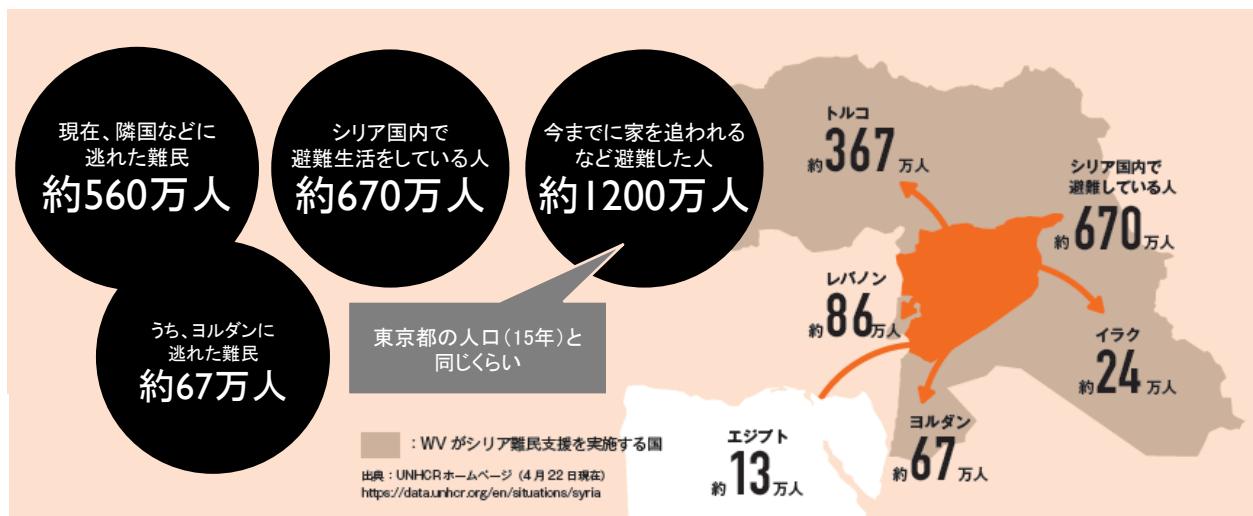
「今世紀最悪の人道危機」と言われるシリア危機。発端は、2011年、日本で東日本大震災が起きたのとほぼ同じタイミングまで遡ります。

「アラブの春」と呼ばれる民主主義と自由を求める活動が中東地域各国で起こるなか、シリアでも政府への抗議デモが起こりました。デモを鎮圧する国軍側と、(多様な)反体制派の間でデモが政治化され、次第に武力を伴った衝突は内戦へと転じていきます。さらに、外国による介入、過激派組織などの武装勢力の登場によって内戦は激しさを増し、その結果、約1,200万人が故郷を追われ、その多くは今日も、故郷や家に戻ることができません。難民となった人々は、時に友人や家族を失いながらも、生き延びるために必死に新たな地に渡り、生活をしています。



登録シリア難民の推移

エジプト、イラク、ヨルダン、レバノンでUNHCR(国連高等難民弁務官事務所)によって登録された190万人のシリア人、トルコ政府によって登録された367万人のシリア人、および北アフリカで登録された31,000人以上のシリア難民が含まれた数字。



今の姿から想像が難しいかもしれません、シリア危機が起きる10年前まで、シリアは文学や音楽など、美しい芸術を誇る文化の中心地でした。また、保健サービスや教育は無料で提供されており、多くの人が医学・アラビア語・アラブ文学を学びにシリアにやってくる、そんな国でした。シリア危機を経験する人々は、美しかった故郷が跡形もなく破壊され、もはや住むこともできない場所となってしまう、精神的な「痛み」も抱えているのです。

出典: UNHCR: <https://data.unhcr.org/en/situations/syria>

NHK: <https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/425674.html>

シリア難民の子どもたちの体験①



シャイマちゃん

難民キャンプの暮らしのはじまり

私たちの村は、ミサイルで破壊されてしまいました。学校の裏で爆発があったので、学校にも行けなくなってしまった。

ヨルダンに逃げよう、とお父さんを説得して、私たち家族は72km歩いてヨルダンに逃れました。早朝から炎天下の中を歩き、妹が熱中症で亡くなりました。

今の暮らし

今はヨルダンで学校に通っていて、6年生です。今日は算数を勉強しました、様々なことを学べることがとても楽しいです。

私がヨルダンに着いてから、ワールド・ビジョンのスタッフがサッカーで遊ぶことを勧めてくれました。友達とサッカーなどで遊ぶことが大好きです。

今では学校で恐怖を感じることではなく、安心して学校生活を送っています。



シリア難民の子どもたちの体験②



ムアスくん（15歳）

難民キャンプの暮らしのはじまり

僕は、家族8人で、2016年にシリアのラッカ（シリア北部の都市）からヨルダンに避難してきました。夜明けに逃げて、とても怖かったです。途中で道に迷ったりしながら、3日間歩き続けてやっとヨルダンにたどり着きました。難民キャンプとたくさんのテントを見て、泣いてしまいました。ヨルダンにいたくありませんでしたが、お父さんの説得で、ヨルダンで（難民として）暮らすことにしました。国境沿いのキャンプで7日間過ごした後、ヨルダンに入国して、アズラック難民キャンプに行きました。アズラック難民キャンプでの僕の住まいは汚く、とても埃っぽかったです。ミールクーポン（食事券）をもらえたのは3日後で、その間、ほとんど何も食べられませんでした。

コロナ禍の生活



新型コロナの前は学校に通っていましたが、今はオンライン授業を受けています。

ロックダウンの間、母にかぎ針編みを教えてもらって編み物をするようになりました。今は小さい子たちに編み物を教えていますが、練習するのに十分な材料を手に入れるのが難しいです。

シリアにいた頃、僕は体操の選手でした。また体操をしたいです。

キャンプ内でワールド・ビジョンが運営しているピース・センターでは友達もできるので、よく行きます。

シリア難民の子どもたちの体験③



フイラスくん（10歳）

難民キャンプの暮らしのはじまり

僕は、7人の家族と一緒に、真夜中にハマ（シリア北西部の都市）を出発してヨルダンに避難してきました。今いアズラック難民キャンプに着くまでに、テントが壊れて舞い上がっているのをたくさん見ました。友達と親戚が恋しいです。

難民キャンプに到着した初めのころは、電気もなく、学校にも通えませんでした。生活を続ける中で、コーランや詩を読む機会があり、詩の魅力を知りました。Youtubeで詩を聞いたりしながら、詩を正確に覚えるようにしました。気に入った詩はfacebookに投稿しています。

今の暮らしと、夢

僕は今、5年生です。将来の夢は、建築士になることです。文化を伝え続けるためにも、詩の朗読も続けたいです。



難民と受け入れ国との間で 起きてしまうこと

なぜ難民を受け入れなければならないの？ ～難民条約とは～

第二次世界大戦後、国を追われて外国に逃れる人々が急増するなかで、1951年に「難民の地位に関する条約」が採択され、その後1967年に同条約を補足する「難民の地位に関する議定書」が採択されました。この二つを合わせて「難民条約」と呼びます。

難民条約には、難民の権利や義務についての規定があります。UNHCRによると、

1. 難民を彼らの生命や自由が脅威にさらされるおそれのある国へ強制的に追放したり、帰還させてはいけない(難民条約第33条、「ノン・ルフルマンの原則」)
2. 庇護申請国へ不法入国した不法にいることを理由として、難民を罰してはいけない(難民条約第31条)

という決まり事があります。どちらも、難民に保護を保障し、命の安全を守るための大切な決まりです。



難民は年々増加し、難民条約の重要性は高まっています。日本から見ると、難民は遠い国で起きている出来事のように感じてしまいがちです。しかし今や難民問題は、世界の国々全体が当事者として考えるべき重要な事柄なのです。

難民受け入れ国での社会的統合と制約

難民受け入れ国における「社会的統合」は、長期化している難民問題の解決策を探るうえで、重要な要素です。社会的統合とは社会の中でお互いを尊重しあい、共存することです。難民の社会的統合がうまく進むと、受け入れ国の社会・経済的な発展に貢献したり、地域社会の文化的多様性を豊かにする利点もあります。一方で、難民受け入れ国における社会的統合には、深刻な制限も存在しています。受け入れ国における限られた資源の分配、安全上のリスク、国民の難民に対する様々な懸念、反感の可能性などが、難民の受け入れ国における社会的統合の妨げとなることがあります。



社会的摩擦が起こる例

例えば、大量の難民を受け入れた国において

- 住まい、食料品、雇用、教育の機会などが「不十分となっている」と人々が感じるとき
- 国際社会の難民受け入れ国での支援が、きちんと平等に行きわたらないと人々が感じるとき

そして、難民と受け入れ側コミュニティーの、歴史的・文化的な違い、政治的立場・宗教的価値観の違い、そして、それらを伝えるメディアの影響も、人々の間の軋轢に影響することがあります。



ヨルダンでの難民基礎情報

●ヨルダン国内の登録シリア難民数の推移



シリア難民の約70%が帰国を望んでいるにもかかわらず、実際には、シリアの一部地域での戦闘や不安定な治安、長期の紛争の影響による生活基盤の欠如などのため、1年内の帰国を見込んでいる難民はわずか2.4%のみです。

●シリア難民はどこで暮らしている？

報道などでは難民キャンプに注目が集まることが多いですが、実はヨルダンにおけるシリア難民の80%以上が、難民キャンプ以外の都市部などで暮らしています。



●ヨルダンにおけるシリア難民の数・割合

ヨルダンの人口：約1010万人に対し、シリア人難民の数は、登録されているだけで66万人、未登録者も含めると130万人にも上るといわれています。

国内の人口のうち一割以上！
割合としては、日本において東京都民が全員
難民となるようなイメージです。

ヨルダン国内のシリア難民の割合



ヨルダンでは、なぜ難民と受け入れ側コミュニティとの間で軋轢が生じているの？

世界銀行の基準では、ヨルダンは中所得国に分類されています。失業率は2021年には24.7%に達し(日本は2.8%)、働く意思がある4人に1人が仕事に就けていない状態です。さらに、ヨルダンはシリア人以外にもイラクなど周辺の紛争国から多くの人を受け入れており、人口の一割近くが難民と言われています。また、ヨルダンでは国民と同じように難民にも教育や保健医療といった公共サービスを提供しているため、国の財政的な負担も大きくなっています。

このような背景から、難民だけでなくヨルダン人の貧困も深刻になっていること、教育の質の低下など公共サービスへの圧迫が目に見えること、そしてシリア危機が長引いており出口の見えない状況となっていることが、「あの人たちのせい…」という思いや、人々の不満につながっています。

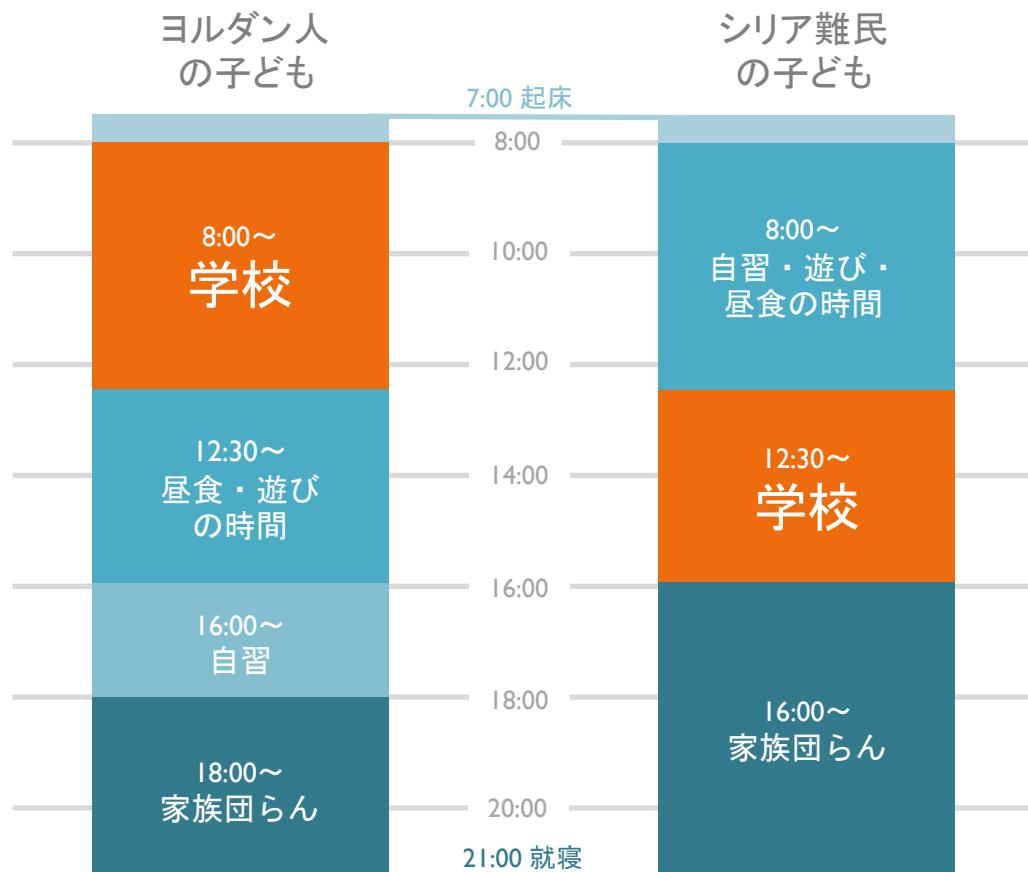
ヨルダンの子どもたち、そしてシリア難民の子どもたちの多くは、「二部制」の学校に通っています。同じ校舎ではあっても、**午前中はヨルダン人、午後はシリア人が学ぶなど、お互いが相手と接する機会が限られています。**



友達になる機会があまりなく、相手のことを良く知らないまま、周囲の大人の影響を受けるなかで、**お互いについて偏見を抱いてしまいやすい状況**にあります。そういうステレオタイプや偏見が、差別やいじめに発展してしまうこともあるのです。

ヨルダンにいる子どもたちはどんな一日を送っているの？

ヨルダンにいる子どもたちの1日を見てみましょう。日本とどのように違うでしょうか？



※新型コロナウイルスの影響を受ける前の一例です



シリア難民に起きていることを通して考える わたしたちにも身近な問題



「外部」から来た人や、異なる環境で育った人々に対する偏見や差別の問題は、シリア難民だけに起きている問題ではありません。

BLM(ブラック・ライブズ・マター)や、アジアンヘイトといった人種差別もあれば、日本国内における一部の在日外国人への不当な扱い、福島の原発事故の影響による風評被害、もっと身近な問題で言えば性差別や障がい者差別、新型コロナウイルス感染者への厳しい視線、学校における様々なトラブルなど、偏見や差別の問題は私たちの身の回りにあふれている課題でもあります。

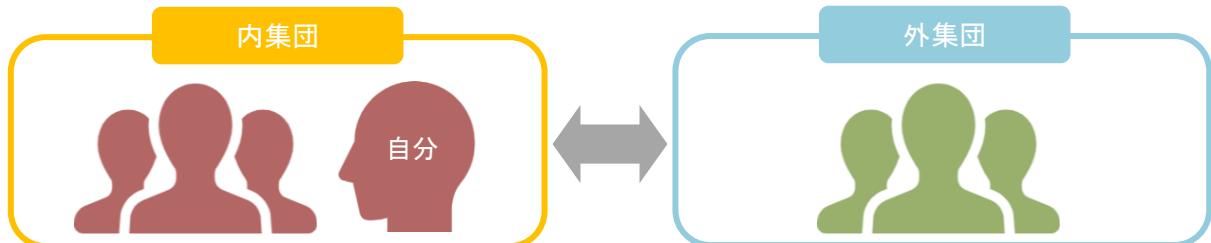
あなたも、自分とは何かが違う「誰か」に対して無関心であったり、冷たくしてしまったり、違いにはばかり目を向けてひどいことをしてしまったり、または逆に自分がそのような態度を受けて傷ついたことはありませんか。規模の大小は問わずとも、偏見や差別の問題は私たちの身の回りにあふれている課題でもあります。

あなた自身の体験が、未来ドラフト2021のヒントになります。

偏見や差別は、ヒトの根本的な性質？

“集団”へのイメージがもたらすもの

社会心理学において、人は味方と敵を分ける心理が働いて、自分にとっての味方を「内集団」、それ以外の敵を「外集団」と区別するのが基本的な考え方とされています。



内集団・外集団の線引きや規模は人やコミュニティそれぞれで異なります。

国や民族の違い、人種の違い、はたまた学校でのクラスの違い、友達同士のグループの違いなど、あなたの生活の中ではどのようなものが見受けられますか？

認知的な傾向が差別の行動に繋がる過程

集団への認知的傾向が実際の差別行動に至るまでには、以下のような過程があるとされています。



このような過程を通して、何気ない先入観や思い込みが、誰かに対する不当な認知や扱いに繋がることがあります。自分と他者との違いをすれば違いや嫌悪ではなく、協力や好意に繋げるにはどのような工夫や仕組みが必要となるか、あなた自身の経験も参考にして考えてみてください。

参考文献

- 「偏見や差別」はなぜ生まれる、社会心理学の観点から読み解く(福田晃広 清談者)<https://diamond.jp/articles/-/236219>
- 偏見や差別はなぜ起こる?: 心理メカニズムの解明と現象の分析(北村英哉・唐沢穣 ちとせプレス 2018)

1. 包括性

多様な背景を持つ子どもたちの尊厳を大切にしているか？



今回のアイデアはシリア難民の子どもだけではなく受け入れコミュニティであるヨルダンの子どもにも届きます。アイデアが届く子どもたちみんなが喜べるものでしょうか？

2. 実現性

あまり費用が掛からず、一般的な技術を用いて実現可能か？



支援の現場ではコストの課題があります。また、ひろく一般的に知られている技術を用いることでひとりでも多くの子どもが参加しやすくなります。

※アイデアの実現はヨルダンにいるワールド・ビジョンのスタッフが行います。

3. 倫理性

インパクトを重視するあまりショックや傷を残さないか？



文化圏が異なる場所では日本ではなかなか想像することができない「文化的なタブー」や、避難する中でのトラウマがあります。アイデアが届く方全員が快く受け入れられるアイデアを考えましょう。

4. 独創性

ありきたりでない、心に残る工夫があるか？



未来ドラフトでは「あなたならでは」のアイデアをお待ちしています！
日本の若い世代から、ヨルダンにいる同世代の子どもたちにアイデアという形で支援を届けましょう！

文化的配慮について

今回の対象地域となる予定の場所は、イスラム教の文化圏になります。対象の学校は男子校と女子校に分かれていますが、特に年齢が高い子どもたちに対しては、以下のような点に配慮が必要となる場合があります。



女の子の肌の露出が
少ないようにすること



男女が手をつないだり、
接触しないようにすること



家族ではない男女が
一緒にご飯を食べるなど
長時間と一緒にすること



特に女の子が公の場で歌ったり
踊ったりすることがよく思われない
こともあるので、過度な
プレゼンテーションを避けること

お互いを知りあうオンラインイベント

現在、シリア難民の子どもたちを受け入れるヨルダンの公立学校の多くは、二部制を導入し、難民とヨルダン人の子どもがそれぞれ、午前・午後に分かれて授業を受けています。子どもたちの心理的ストレスを減らすため、そしてお互いを理解しあうために、ワールド・ビジョンは様々なイベントを行っています。

コロナ禍で行われた「オンライン・コンペティション」では、ヨルダン人・シリア難民の子どもたちが、自宅で演劇・お絵かき・スポーツ・本の音読を行う様子をオンラインでクラスメイトに共有し合いました。自分を表現しながら楽しみ、またオンラインでもコミュニケーションを取って、お互いを知る機会となりました。



UKアーティストとのコラボを実現！

ワールド・ビジョンの「オンライン・コンペティション」を通じて、シリア人難民のラーマちゃんはお絵かきの才能を見出され、その結果、イギリスのアーティストとつながることができました。これをきっかけに海外でラーマちゃんの絵の展示会も予定されています。



避難生活の中で困難がたくさんありました。その中で私はお絵かきに出会いました。お母さんはいつも絵を描くことを応援してくれます。将来の夢は留学に行くことと、海外で画材を貢うことです

